

震災教訓の共有むすび塾@インドネシア（河北新報社と共催）

掲載 013 年 04 月 24 日

(C)河北新報社



東日本大震災の被災者とスマトラ沖地震で被災した現地の住民が、教訓の伝承について意見を交わした—23日午前11時ごろ、バンダアチエ市のムラクサ地区（写真部・佐々木浩明撮影）

むすび塾@インドネシア・ムラクサ

二つの被災地思い共有

海外で初のワークショップ

【バンダアチエ（インドネシア）高橋鉄男＝報道部記者】東日本大震災の教訓を今後、海外で初めて開催した。東日本大震災の被災者3人と現地住民10人が、教訓を語り継ぐことの重みを確かめた。

東日本大震災の教訓を今後、海外で初めて開催した。東日本大震災の被災者3人と現地住民10人が、教訓を語り継ぐことの重みを確かめた。

東日本大震災の被災者3人と現地住民10人が、教訓を語り継ぐことの重みを確かめた。



いのちと地域を守る



ムラクサ地区 16の村からなる。2004年のスマトラ沖地震では全ての村が壊滅的な被害に遭い、住民約3万4000人の9割が犠牲になった。被災後は国内外の支援を受けて住宅を現地再建し、住民は1万6801人（11年）。漁業や農業が盛ん。

イスラム教寺院のおさむザミさん(62)は「神様は、津波は次も起きるだろう、津波を思い続けると言っている」と話した。東松島市の目田行政委員長中山勝文さん(67)、大崎市水難学会指導員安倍志進行役を務めた被災・復興支援機構（東京）の木村拓郎理事長は「災害体験を代々語り継ぐことができれば、犠牲を抑えられる」と強調した。

当時住んでいた東松島市東北学院大3年渡辺英新さん(20)が被災体験を語った。